

ゲーテの自然観

— ゲーテの自然科学研究の意義について —

(その2)

溝 井 高 志

目 次

はじめに

I ゲーテとカント

II 疾風怒濤期のゲーテの自然観 (以上既刊)

III ゲーテの自然科学論 (以下本号)

おわりに

III ゲーテの自然科学論

したがって、ゲーテが自然科学の研究を通して、自然の認識を得るための活動は、本質的には芸術的な活動と何ら異なるところがなかった。彼の文学的な直観、ひいては彼の自然観、世界観の妥当性を裏書きするための営みが、彼の自然科学研究の目的とするものであった。或いは、彼の自然科学研究は、彼の文学観、自然観、世界観をより確かなものとするための営みであったと言うことができよう。したがって、彼はこう言っている。「芸術家が自らの才能に加えて、ひとかどの植物学者となり、根から始まって、植物の繁茂、成長を促すさまざまな部分の互いの影響にいたるまでそれらの部分が規定し合い、相互に作用し合うさまを認識し、葉、花、受精、莖、および新しい芽が順次成長していくさまを調べ、それについてよく考えをめぐらすならば」、芸術家としてより成長し、確固とした信念をもつに至るに違いない、と³⁸⁾。芸術において、自然の創造の中に含まれているのと同じ合法則性を表現にもたらすことが多くあればあるほど、その作品は完璧であり、それは自然の造化に対応している。自然の中の合法則性を明らかにすること（科学）と、それを表現

にもたらすこと（芸術）との間には大きな径庭はない。この自然の中の合法則性を表現することに文学の目的を置いたところに、中期ゲーテの古典主義時代の文学観が色濃く反映している。こういう文学観に立つ中期のゲーテにとって、自然の合法則性を明らかにする自然科学研究の意味はいよいよ大きかったと言わなければならない。

自然の中の合法則性をゲーテは「原型 (Typus)」という言葉で表現する。この「原型」とはゲーテの形態学的な制約の思想を端的に示すものであり、この「原型」を、ゲーテは、具体的な現象としてはさまざまな形態を取りつつ、基本的には常に普遍的な形態であり続けるもの、すなわちどこまでも無限に可変的でありながら不変的なものとして考えた。このゲーテの自然科学研究において意図したものを最も成功させたのは植物学においてである。この自然の中の合法則性としての「原型」が、植物学においては、「原植物 (Urpflanze)」として表現される。この「原植物」をゲーテは収縮 (Zusammenziehung) と拡張 (Ausdehnung) を繰り返す「葉 (Blatt)」、或いは「節と葉 (Knoten und Blatt)」とみなし、その「葉」あるいは「節と葉」をゲーテは植物の根本器官と考えた。そしてその根本器官である「葉」の変容、変態 (Metamorphose) によって、植物の個々の器官が形成される。すなわち、葉は最初は種子として収縮状態にあるが、それはやがて子葉として拡張する。そして節として葉は収縮する。ところが節のところでそれは葉として拡張する。更に、萼において葉は再び収縮し、花冠として

それはやがて拡張し、生殖の器官である雄蕊と雌蕊において再び収縮する。そして結実の段階で、植物はその最後の拡張の段階に達し、最後に種子の中で再び収縮する。これによって植物の成長は一つの循環を完了し、再びその全過程を繰り返す。ゲーテはこの植物の生成発展の過程において、生き生きとした葉の変容・変態を観た。

次にゲーテが重要な業績を残した動物学においては、植物学の「原植物」のような統一的理念を発見することはできなかったが、いくつかの個々の事実、或いは法則を発見するのに成功した。その顕著な例は「顎間骨 (Zwischenkiefer)」の発見にある。それまで、左右の上顎骨の間にはさまれた骨である顎間骨は人間以外の他の動物にはあるが、人間にはないとされていたが、ゲーテは人間も動物である以上、人間にも絶対に顎間骨はなければならないと考え、人間の中に顎間骨を執拗に捜し求めるが、ついに彼はそれを異常な発達を示す頭蓋の中に発見する。人間の顎間骨は左右で上顎の骨と癒着し、しかも健全に成長した個人にははっきりとした境界線が見られないという事情が人間には顎間骨はないという誤解を生むに至った。そして従来の考え方では、それが人間が他の動物から区別される有力な一つの根拠と見なされた。しかし、ゲーテの考えによれば、人間の体型は動物の体型の最高の発展段階に過ぎず、人間が人倫的な世界を自分から作り出すことができるのは、その人間の体型が動物的なものの完全性の度合いに達していることによるというのが、彼が1782年に『神性 (das Göttliche)』という頌歌ですでに書き記した理念であった。

人間は気高く、
慈悲深く、善良であれ！
そのみが
われわれが知る
すべての世界から
人間を区別するのだから。

———

永遠の、確固たる
偉大な法にしたがって
われわれは
己れを取り巻くすべての世界を
完全なものとしなければならぬ³⁹⁾。

人間を他の動物から区別するのはその人倫性においてであって、体型においてではない。その確信の証となるものがこの顎間骨の発見であった。これを彼に発見せしめたのは、自然の中に統一的な創造的な働きを観る彼の直観であった。それほど高く評価されず、しばしば高名な文学者の余技としかみられることのなかったゲーテの自然科学上の業績の唯一の貴重な発見として過大に評価されがちな顎間骨の発見であるが、しかしこれを余りに過大に評価することは、ゲーテの自然科学上の業績を正当に評価するものとはならない。これはただ単に彼の自然観の有効性を証明するものとして評価されるべきであって、彼の自然観を抜きにしてそれ以上に過大に顎間骨の発見を評価することは、ゲーテの自然科学上の業績からすれば本末転倒になる。

植物の形態の形成法則を知ること成功したように、彼は動物の形態の形成法則をもまた知りたいと念願する。しかし、それは必ずしもうまくいかなかった。すなわち、すべての動物の形態、器官を一つの根本的な器官から説明すること、完全な動物の形態の法則性を唯一の観念として把握することは、ゲーテにはできなかった。ただ動物の一形態の一部分についてのみ、すなわち脊髄と脳髄を取り囲む骨についてのみ、彼はその法則性を発見したと考えた。それがいわゆる「頭蓋推骨説」である。

ゲーテによれば、頸骨、尾骨、胸骨のみならず、頭蓋骨もまた脊椎骨 (Wirbel) の変容から生じる。人間においては、動物の機能の完全性から脊椎骨が頭蓋骨において完成された形態を取るのに対して、低次の動物においては、それは低次の段階にとどまる脳髄として認められると彼は考える。1790年にヴェネチアのリドの海

岸で羊の頭蓋骨を見つけた時に、それはうまい具合に割れていて、口蓋骨と上顎骨と顎間骨において、三つの脊椎骨が変形した形で明らかに見えた。たとえ頭蓋骨の軟骨の囊の中に、もはや脊椎骨の構造が感覚的に認めることができない場合であっても、やはり理念としては存在するのであり、そこに条件が加わりさえすれば、それは再び現象となって現れる。頭蓋骨と見えるものがない場合でも、脊椎骨には頭蓋骨へと発展していく可能性は理念としては含まれている、とゲーテは考える。

こういったゲーテの形態学の基本的な理念の一つとして「適応の法則」がまず挙げられる。個々の有機体の形式は、原植物が、或いは、原動物が、特別な状況の中で、一定の形態をとることによって成立するが、その場合、形態が動植物のあり方、生き方を規定すると同時に、そのあり方、生き方が逆にその形態を規定する。具体的な形態というものは有機的な内なる形式と外なる形式が作用し合うことによって成立する。しかし、その場合、外的な関係が直接形態を作り変えるわけではない。外的な関係（外的な要因）は、内的な本質（内的な要因）が変化するきっかけを与えるに過ぎない。あくまでも変化する主体は内的な本質としての有機的な形式にあり、変化した生の条件が有機的な形式を刺激して、その内的な法則によって、何らかの方法で、その形態が作り変えられる。外的な影響は間接的に生のあり方に作用するが、直接には作用しない。

こういった「適応の法則」のために、ゲーテはしばしばダーウィンの進化論の先駆と見做される。外的な条件に適応する形で種が変容を遂げていくというところに、確かにダーウィンの先駆とみなされる考え方が見られるが、「原型」をどう考えるかによって両者には大きな差異が生じる。ダーウィンの考え方からすれば、あらゆる形態の原型は特定の祖先型の具体的な種に求められ、祖先型の種が無限に進化せられて、その数を増やしていくのであって、変容を内側から規定する形態学的な制約としての有機的な

根本的な形式といった意味での「原型」の思想はダーウィンには見られない。ゲーテにおいては、種の変容はあくまでも形態学的な制約としての原型の枠内でのそれであって、変容していくのは、原型に制約されたものとしての有機的な形式であり、しかもその変容はその原型の範囲を超えることがない。ゲーテは、**内的な衝動力としての有機的な形式**を進化の働きの前提として考える。

更にゲーテの形態学的な理念をよく表わすものに「補完の法則」が挙げられる。自然がある形式の中で一つの部分を特殊な形式で十分に形成する場合、それは他の部分を犠牲にしてはじめて可能であるという考え方がそれである。個体の多様性は、有機的な形成の力がある部分に特別に働きかけられることによって、ある部分は際立った発達を示すが、代わりに他の部分は外的な現象においてまったく生じないか、ただ暗に示される程度にだけ発達させられるにとどまる。こういう形態学的な理念に、自然の中に有機的な形成する力を看取するゲーテの自然観の特徴がよく伺われる。

ゲーテは植物学、動物学といった個別の分野でしか形態学的な研究の成果をあげることができなかったが、ゲーテは更に有機体の一般的な形態学という分野を打ち立てようと考えていた。有機的な原存在が、一方では、多様な植物世界に、他方では、多様な動物の形式へとどのように発展していくかを、更に、虫とか、昆虫といったような特種な形式から比較的高次の動物、人間に至るまでの形式がどのように普遍的な原像から導き出されてくるかを示そうとした。低次の有機体において、単純に外的な現象として示される形成衝動を、段階的に一層完全な形態において自らを実現し、ついには人間において精神的な創造者たるにふさわしく形成しようとする向上的な働きとして叙述しようと企てていた。こういった学問の確立によって、解剖学、博物学、物理学、化学、植物学、動物学、生理学といったもろもろの学問が自然の有機的な形成というより大きな視点から説明されて、

それぞれの位置付けを得ることができるとゲーテは考えた。

更にゲーテはその有機的自然観を色彩学、光学においても発展させる。とくにこの分野において重要なことは、これらの研究によって、ゲーテが、ニュートン、或いはその亜流科学者を通して主流となりつつあった無機的自然観、物理的自然観に徹底的に反論を加え、その流れに修正を加えようとしたことであろう。近代自然科学は、感覚世界の事象を最小の物質の運動に還元し、質的なものをも量的なものへと還元していく方法にその特徴をもつとすることができる。近代の物理学においては、外界にはただ量的なものだけがあって、あらゆる質的なものは、量的なものが感覚的、精神的な要素をもった有機体に作用する場合にはじめて生じると考える。光の現象も知覚することのできる質からではなく、知覚することのできない要素の極小部分から説明される。しかし、ゲーテ的な自然観からすれば、質的なものを知覚することのできない量的なものに還元することは、抽象であって、そういう抽象的な方法によって具体的な知覚の現われを説明しようとする手法がゲーテには気に入らなかった。

ニュートンは、このような還元的な方法によって、白い光はさまざまな色の光の粒子から合成されたものであり、その個々の要素としての粒子から白い光が分かれて出てくることによって色彩が生じると考えた。その際に、プリズムはその白い光が分離するのに役立つ。ニュートンの考え方では、暗い部屋の中に小さな孔から差し込んできた光をプリズムで受け、その光を更に衝立で受け止めると、光が分離して、上から赤、橙、黄、緑、青、藍、堇色（光のスペクトル）に分かれる。或いは黒地の上の白い紙をプリズムを通して見ると、逆に上から堇、藍、青、緑、黄、橙、赤に分かれる。ところが、たまたまゲーテがプリズムを手にとって、白い壁を見たところ、段階的に色が現われるはずの白い壁は白いままであった。ただ白い壁が暗いものに接するところだけ色が現われた。とりわけ、

窓の棧は鮮明な色を伴って現われた。この観察から、ゲーテはニュートンの観察が間違っていると悟り、白い光の中には色が含まれていないと彼は考える。しかし、黒地の上に白いテープを置いて、或いは、白地に黒いテープを置いて、プリズムを通して見た場合だけ、黒いものが明るいものの中に変位されてずれて入り込んでくること、或いは、明るいものが黒いものの中に変位されてずれて入り込んでくることを、そしてその際にだけ色彩が生じることをゲーテは発見する。この場合、プリズムは明と暗、光と闇が互いに変位しあうのに役立つ。このような実験から、ゲーテは、境界と暗いものが色の成立には不可欠であると悟り、色彩（die Farben）は闇と光（Finsternis und Licht）、明と暗（Hell und Dunkel）が混じり合うことによって生じると考える。

闇は光に対立する。暗闇は完全な力のない光の不在ではない。それは作用するものであり、光に対立し、光と交互に作用する。闇はその作用する力によって光を弱めることができ、逆に、光は闇のエネルギーを制限する。それによって色彩が生じる。黄色は闇によって弱められた光であり、青は光によって弱められた闇である。例えば、曇りを通して、明が見られる場合には黄色が現われ、闇が見られる場合には青色が現われる。この黄色と青が基本色で、その基本色がそれぞれ高進する（sich steigern）、つまり濃度ないしは暗度を高めることによって、両者は赤みを帯びる。したがって、ゲーテによれば、赤は基本色ではない。赤は黄色と青が変化することによって現われる。その青と黄色が混じり合うことによって、緑が生じ、また青が高進することによって堇色が生じ、黄色が高進することによって橙が生じ、更にそれぞれが高進することによって、最も純粋な赤である深紅色になって、その両端で一致する。このように、ゲーテは黄色、青、緑、堇、橙、深紅色の現われを説明する。

この色彩の基本的な現象を自然の中で探究すると、一例を挙げれば、こうなる。すなわち、

曇った霞の紗を通して明るい日輪を見ると、黄色が現われる。日の光に照らされた大気中の霞を通して暗い空間を見つめると、空の青が現われる。「同じようにわれわれには山は青く見える。というのも、もはや山の固有の色が見えない位に、そしてその表面の光がもはや目に届かない程に遠くから山を見ると、それはただ暗い対象となり、それがその間にある霞を通して見られるために青く見えるのである」⁴⁰⁾。このように、ゲーテは色彩を光と闇の何らかの有機的な相関関係において説明する。

特にその特徴を端的に示すのは、生理的色彩論であろう。生理的な色彩は外からの刺激と内なる器官としての目の作用の相関関係から生じる、つまり外なる光が内なる光を刺激することによって生じる。ゲーテによれば、目の中にも光が潜在していて、その光が内部あるいは外部からの刺激がきっかけとなって誘発されて現われる。「目はその存在を光に負っている。とるに足らない動物の補助器官にも、光は光と同じ種類の器官を呼び起こす。目が光のために光に基づいてつくられているのは、内的な光が外的な光に向かって流れ出すためである」⁴¹⁾。目の中に光が内在する証として、ゲーテは夢を挙げている。あるいは、視覚器官が機械的な衝撃を受けることによって光と色彩が眼から飛び出してくることにその証を見ている。

目が太陽のようでなかったなら、
どうしてわれわれは光を見ることができるだろう？
もしわれわれの中に神みずからの力がないとしたら、
どうして神的なものがわれわれを歓喜させることができるだろう⁴²⁾。

という色彩論の中に記されたゲーテの有名な詩はその間の事情を美しく伝えている。こういった外からの刺激と目との複雑な相関関係を残像とその明暗の逆転現象を通してゲーテは説明する。目に対する印象はしばらく目に残る。明る

い光を背景に黒い窓の棧を見た後、目を閉じると、しばらくはその現象が目に残る。その印象が残っている間に、明るい灰色の表面を見つめると、その棧は明るく、それに対して窓ガラスは黒く見える。ここに明暗の逆転が起こる。この事実から、外部からの印象を受けると、目は自分自身から正反対のものを生み出そうとする傾向があると推測される。目に暗が提示されるとき、目は明を要求する。目に逆に明が提示されるとき、目は暗を要求する。このように、目は客体に対立するものを自分の中から生み出すことによってまさしく、客観を捕らえる生き生きとした力と権利があることを示す。

以上、ゲーテの自然科学論の一部を、R.シュタイナーの理解に則りながら、紹介してきたが、ゲーテが自らの自然科学論によって意図したものは何であったのであろうか。ゲーテは自身の自然科学論を、自身の文学的業績以上に評価しているが、それほどに彼自身が評価する自然科学論によって伝えようとした自然科学論のもつ意味はどこにあったのであろうか。R.シュタイナーはこのように言っている。

われわれが『植物の変態（メタモルフォーゼ）』『動物の変態（メタモルフォーゼ）』という二つの詩を目にすると、それらの言葉はあたかもわれわれを有機体の一つの部分から他の部分にいざなうかのように、あるいは外的な事実があたかも緊密に結び合わされているかのようにわれわれには思われてくる。しかしわれわれが、生命の本質に深くかかわっていくとき、われわれはあたかも自分が生きた、有機的なものの中に移し替えられるかのように感じられ、一つの中心的な観念をきっかけに個々の器官についてのさまざまな観念がわれわれの中に芽生えてくる⁴³⁾。

この言葉の中に、R.シュタイナーのゲーテの自然科学論についての結論的な評価が示されている。まさにゲーテの自然科学論のエッセン

スを的確に言い当てていると言うことができよう。ゲーテは自然の中の有機的な働きを詳細に述べていく過程において、読者のわれわれをその有機的な働きの中に引き込み、あたかもわれわれ自身の中に内在する有機的な働きがわれわれ自身を通して覚醒し、働き出すかのような感興へとわれわれを誘い込む。そこにゲーテの自然科学論が、それを読む者に、冷たい自然科学者の観察とは違って、詩的な感興、高揚感を覚えさせる所以、秘密がある。

この自然科学論の根底にあるのは、自然をばらばら極小の物質という素材から合成された機械的なものとしてみる冷たい自然科学者の目ではなく、自然の中にまず統一的な有機的な働きを観る詩人の直観である。しかし、疾風怒濤期を経て、ゲーテは今その詩人的直観からするエントウジヤスティッシュな、熱狂的な情熱の不毛を余りにも深く知り過ぎていた。神秘主義的な観想に耽溺することを意識的に避けたのも、経験的世界から遊離していくことの危険、不毛をみずからの若い時代の体験に照らして深く予感していたからであった。ここにはただ単なる恣意的な詩人の自然認識とは異なった、あくまでも自然の中に客観的な合法則性を発見せんとする科学者の眼差しがある。まさにこの科学者の眼差しと詩人の眼差しがあいまって、自然ははじめてその有機的なものの働きを純粋に明らかに開示する。

おわりに

この自然の中の有機的な働きを追求する過程で、彼が追い求めたものは何であったのか。それは、以上に見てきたように、自己自身の中に有機的な自然の創造的な働きを覚醒せんとすることにあったのではなからうか。疾風怒濤期ゲーテは「どこでとらえたらいいのだ? 無限の自然よ(Wo fass' ich dich, unendliche Natur?)」⁴⁰⁾と痛切な嘆きの声を上げたが、ゲーテは、この自然研究を通して、深く自然をその懷において

とらえる手がかり、自身の中に働く自己と自然が一体化した有機的な働きを自己意識として深化する手がかりを得たと言わなければならない。ゲーテの自然認識は自己認識へとつながっていく。ゲーテは自然の認識を通して、自己認識を深めることを求めた。或いは、自然認識を深めていく過程で、自己と他との同一性の自覚を深めることを欲した。疾風怒濤期ゲーテの自然認識の特徴は、常に自己の内なる力の発現をまっぴらなされる点にあり、内なる力が枯渇するときにはまた、自然の生き生きとした力の発現を感知する能力をゲーテは失った。ヴェルターとファウストの苦悩はそれを証明する。ゲーテの自然認識においては、常に内なる世界と外なる世界の相関関係が問題となる。ところが、その内なる力の枯渇に悩む中期のゲーテは、逆に、自然科学研究において、自然の力を有機的・統一的な力として把握することによって、内なる創造の力、有機的統一の力を覚醒することを欲した。自他同一の根源的自己直観にたどり着くことが自然科学研究において究極的にゲーテが意図したところのものであったと言えよう。ゲーテの内なる世界と外なる世界の相関関係について、R.シュタイナーはこう記している。

最も内的な人間の本性について考察し、自己を観察するための器官がゲーテには欠けている。「・・・人間は、自分の中にのみ認めることのできる世界を知り、世界の中にのみ自己自身を認めるかぎりにおいてのみ、自己自身を知る。あらゆる新しい対象はじっくり観察されるならば、それにとともに新しい器官がわれわれの中に呼び覚まされる」。そのことに関してはちょうど逆のことも真実である。人間は自分を知るかぎりにおいてのみ、世界を知る。その理由は、外界の事物の中で、反映、たとえ、象徴において直観されるものが、その最も本来的な形で人間の内面の中で明らかになるということによる。いつもはただ、究め

ることのできない、探究することのできない神的なものに関して、人間が口にしていくものと同様のものが、自己直観の中で、その真なる姿で人間の眼に明らかになる。人間は自己直観の中に理念的なものをその直接的な姿で観ることができるが故に、人間はこの理念的なものをあらゆる外的な現象の中に、全自然の中に探し求め、認知する力、能力を獲得する。自己直観の瞬間を体験したものは、もはや現象の背後に「隠された」神を探し求めるようなことを考えようとしめない。彼は神的なものを自然の中のさまざまなメタモルフォーゼ（変態）の中で把握する⁴⁵⁾。

この文章でR.シュタイナーが引用しているゲーテの論文『機知に富んだ一語による著しい促進（Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort）』の中の言葉、「自分の中にのみ認めることのできる世界」とは、要するに有機的・統一的な自然の力であろう。それが、外的な世界においてじっくり観察されるならば、その力（新しい器官）をわれわれは自分自身の内に呼び覚ますことができると、ゲーテは断言する。しかしそれでは、逆のことも真実ではないかとR.シュタイナーは問う。内なる世界で、それが最も直接的な姿で感知されるならば、人間は敢えてそれを外なる世界に探し求める必要はないではないかと。しかしゲーテにはその内的な器官が欠けていたが故に、彼はそれを外なる世界に探し求めざるをえなかったと、R.シュタイナーは推論する。確かにゲーテ自身、自分には哲学するための器官が根本的に欠けていると明言している⁴⁶⁾。或いは、ゲーテがそれを内なる世界において探究することを敢えて意識的に避けたこともまた事実であろう。ゲーテは言っている、「汝自身を知れ」という偉大で意味深く聞こえるあの課題は、私にはいつも、人間を不十分な要求によって混乱させ、外界への活動から目をそらせ、内的な誤った直観へを誘い込もうとするあたかもずるがしこく

企む坊主の奸計のように疑わしいもののように思われた」⁴⁷⁾と。

ゲーテは、ハインロートが指摘し、ゲーテ自らが「私の思考能力は対象的（gegenständlich）に働いている」⁴⁸⁾と認めているように、対象的思考の人である。この対象的に思考するとは、誤解してはならないが、事物を対象化して思考するという意味ではない。そうではなくて対象に入り込み、対象に即しつつ思考するという態度であり、むしろいわゆる客観化するという意味での対象化とは逆の意味である。対象に即しつつ思考するとは、主客一体化しつつ思考するということであろう。実体のないところで思弁的に思索することに、不毛な人間の営みを見、そこに対象から遊離し、実体のない世界に落ち込んでいく危険性をゲーテは敏感に意識していた。自然について科学的な眼差しを向けることなく、恣意的な感情に振りまわされつつ自然を認識することの不毛に、疾風怒濤期ゲーテは倦み疲れ、その体験から、自己自身についてもまた、経験を介することのない実体なき観想に陥ることに、より強い危惧の念をいだいていた。自己を認識する場合であっても、常に対象に即しつつ認識の行為を遂行することにゲーテは努める。自然科学研究を通して自己直観に達しようとしたのはそのためであった。自然の中に内在するものと自己の内面世界にあるものとは同一であるが故に、実体のない自己の世界に眼を向けるのではなく、自然の世界において対象に即しつつものを観るという姿勢を堅持することによって、外なる世界に自己自身の反映を見ようとした。しかし、**対象に即しつつ自己自身を観る**という以上に、自己自身の世界へと敢えて踏み込んでいくことをゲーテはしない。その点で、ゲーテの自己直観は結局は不徹底であると、R.シュタイナーは考える。外なる世界と内なる世界において同一の力が働くのなら、むしろ内なる世界においてこそそれが探し求められるべきではないのかと。自然の中の有機的な統一的な力の発現を明らかにし、しかも、それが内なる世界の力と同一のものであるという直観に

まで達していた点において、R.シュタイナーはゲーテを高く評価しながら、なおその自己直観の深化において、ゲーテは不十分であったとR.シュタイナーは批判する。

ゲーテの人生は三段階に分けられる。第一段階はシュトラースブルク時代を経てワイマールへの逃走までの、いわゆる疾風怒濤期の若いゲーテの時代。第二段階はワイマール時代のシラーとの死別までのいわゆる中期ゲーテの時代。この時代はまた古典期ゲーテの時代にあたる。この時代のゲーテの芸術的な規範はギリシア、ローマの古代に求められる。藤井外典氏はこの時代のゲーテを非宗教的な時代のゲーテと呼んでおられる⁴⁹⁾。そして、第三段階は、シラーとの死別の後のゲーテの晩年の時代。この時代にゲーテは神秘的・宗教的な色合いを深めていく。

R.シュタイナーの上に挙げた批判、つまり、ゲーテは深い根源的な自己直観には届いていないという批判は、確かに、中期ゲーテについてはそのままあてはまる。しかしこの中年期に培った深い自然観照の眼差しを自己自身に振り向けることを晩年のゲーテがしなかったと言い切ることが果たしてできるであろうか。多くのゲーテ批判がしばしば限られた時代のゲーテに向けられているという意味での年代的な限界をもっているように、R.シュタイナーのその深いゲーテ理解にもかかわらず、R.シュタイナーのゲーテ批判にもまた同じ限界をわれわれは指摘することができないであろうか。もっとも、自己直観の形で、自己の内面において、直接的に己の中に働くこの自然の有機的・統一的な力をゲーテが感知し、それを明確に意識していたことは、R.シュタイナーも認めている。しかしそれをゲーテは直接的な形では語ることをしてこなかったと、R.シュタイナーは指摘する。

はっきりと、明確に記された文章で、彼の本質の核心を表現することは、彼の本性の中にはなかった。そのような文章は現実を正しく映し出すよりも、むしろ歪めるもの

のように彼には思われた。生き生きしたものの、現実的なものをはっきりとした思想として固定したものに対することに対して、彼はある種のためらいを感じた。彼の内的な生、および外界との彼の関係、事物と事象に関する彼の観察が余りにも豊かであり、繊細な要素と、極めて個人的な要素で満たされていたので、それらのものが彼自身によって単純な公式として表わされることはなかった⁵⁰⁾。

たとえ彼が自分の世界観を完結した体系の中で言い表してこなかったにしても、彼はそれを完結した人格の中で示してきた⁵¹⁾。

これ以外の文章でも、R.シュタイナーは、ゲーテが己れの本性を、あるいは世界観を客観的な表現として提示することに極めて慎重であり、常にある種のためらいを感じていたということを繰り返し指摘している。ただ彼はそれを人格として表現してきただけであると。その人格の中で働く力とは有機的に生きて働く力であり、その生きている力を一定の公式として、概念として提示することは抽象であり、それによって生きたものは台なしにされ、そこなわれ、歪められ、疎外されることをゲーテは怖れたと言うべきであろう。従って、ゲーテはその自己直観としての自然意識を絶えずただ人格の中で示してきたとR.シュタイナーは言う。それではそれを人格の中で示すとはどういうことであろうか。自己直観もまたその内実が対象化され、思弁化されるなら、それは抽象化の弊を免れることはできない。ゲーテはいかなるかたちで自己直観をおこなったのか。自然科学研究において、自然をメタモルフォーゼという生成の過程の中で認識しようと努めたように、ゲーテはひたすら自己生成、自己変容、自己変態の過程においてのみ自己の直観に達しようと欲したのではなかろうか。R.シュタイナーは先の文章の中で、

彼は神的なものを自然の中のさまざまなメ
タモルフォーゼ（変態）の中で把握する⁵²⁾。

と言っているが、この点は重要である。メタモ
ルフォーゼこそが生成する、創造的な自然の有
機的な統一的働きそのものであろう。ゲーテが
「どこでつかまえたらいいのか？ 無限の自然
よ！」という戸惑いを見せたのは、若い時代の
ゲーテがこの一点を捉えていなかったことによ
る。ゲーテにおいて、深い自然観照、自己直観
が可能になったのは、このメタモルフォーゼ
（変態）の思想によってである。そしてそれこ
そが、ゲーテが自然科学研究を通しての自然直
観から得た自己直観であった。自己直観と言
っても、それだけでは単なる抽象にとどまる。
メタモルフォーゼし、生成する自然、あるいは
生成する自己自身こそが理念的なもの、神的な
ものの本質であろう。この自然とともに生成
発展していく自己自身の働きに即するかたち
で、ゲーテは深い自己直観を体験していったと
言うことができよう。ゲーテはアイデア世界の中
で生き、それを彼の観察の中に浸透させようと
してきた。「たとえ彼が自分の世界観を完結し
た体系の中で言い表してこなかったにしても、
彼はそれを完結した人格の中で示してきた」と
いう上に挙げたR.シュタイナーの言葉は以上
のような文脈の中でこそ理解されなければならない。

しかし中期ゲーテは、まだその糸口をつかん
だにとどまる。そしてこのゲーテのメタモル
フォーゼ、自己生成の過程を明らかにすることは、
若い時代から中年期、晩年にかけてのゲーテの
長い人生の軌跡の中であらためて追跡、検証さ

れなければならない課題であると思われる。

注

- 38) J. W. Goethe, Einfache Nachahmung der Natur, Manier, Stil, Weimarer Goethe-Ausgabe, 1891-1896 vom Goethe-Archiv im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen, Bd. 47, S. 82.
- 39) J. W. Goethe, Das Göttliche, in Hamburger Ausg., Bd. 1, Verlag C. H. Beck, München, S. 147.
- 40) J. W. Goethe, Naturwissenschaftliche Schriften, S. 363.
- 41) *Ibid.*, S. 323.
- 42) *Ibid.*, S. 324.
- 43) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, S. 103, 104.
- 44) J. W. Goethe, Faust, in Hamburger Ausg., Bd. 3, Verlag C. H. Beck, München, 1976, S. 22.
- 45) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, S. 90, 91.
- 46) J. W. Goethe, Naturwissenschaftliche Schriften, S. 25.
- 47) *Ibid.*, S. 38.
- 48) *Ibid.*, S. 37.
- 49) 「個我が道義と調和の内に自足的満足を得ようとしたこの時代のゲーテの内面は、必然的に宗教的なものから遠かったと言わなければならない。一般に古典主義的時代のゲーテが、非宗教的な時期であり、『ファウスト』制作の中断期であるとせられるのには、このような意味が汲みとられなければならない。」（藤井外興『ゲーテの思想と自我の問題——デモニーッシュなもの——』東洋出版、1891年、36ページ）
- 50) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, S. 14.
- 51) *Ibid.*, S. 15.
- 52) *Ibid.*, S. 91.

（1998年10月13日受理）